

教務だより

2017年4月号
茗溪塾

茗溪塾教務部 03-3659-8638

僕が飛び跳ねる理由

茗溪塾塾長 宇野雅春

東田直樹君が13歳の時に書いた「自閉症の僕が飛び跳ねる理由」は、世界の20か国以上で翻訳されベストセラーになっています。当時東田君は、グリム童話賞を受賞しており、現在は作家として活躍しています。

NHKのドキュメンタリーが2日間にわたって放映されたとき、たまたまTVを見ていた私は、大きな驚きと同時に、深い感動を覚えました。

「僕たちは、自分の体さえ自分の思い通りにならなくて、じっとしていることも、言われた通り動くこともできず、まるで不良品のロボットを運転しているようなものです。いつもみんなに叱られ、その上弁解もできないなんて、僕は世の中のすべての人に見捨てられたような気持でした。僕たちを見かけだけで判断しないでください。どうして話せないのかはわかりませんが、僕たちは話さないのではなく話せなくて困っているのです。自分の力だけではどうしようもないのです。自分が何のために生まれたのか、話せない僕はずっと考えていました。僕は筆談という方法から初めて、現在、文字盤やパソコンによるコミュニケーション方法を使って、自分の思いを人に伝えられるようになりました。自分の気持ちを相手に伝えられるという事は、自分が人としてこの世界に存在していると自覚できることなのです。話せないということはどういうことなのかという事を、自分に置き換えて考えてほしいのです。

（僕が飛び跳ねる理由）」

ドキュメンタリーは、自閉症の子を持つアイルランドの作家 ディビット・ミッチェルとの交流、その息子との出会い、自閉症の子を持つ親たちとの出会い、認知症の祖母とのことなど、私たちが今まで知らなかった自閉症の青年の内面を強く感じさせるものでした。最後にこの番組を制作したディレクターが、取材中にガンであることを告知され、余命宣告に混乱しながら東田君に「何か言葉を…」と願い出る場面がありました。死という重い課題をどこにも持っていきようもない状況で、もしかしたら彼なら何か言ってくれるのではないかと？とディレクターは問います。その時、何故自分にそんなことを聞くのか…と東田君は大いに戸惑います。それでも再三の願い出に意を決したように、いつものように紙に書いたキーボードを指で押さえながら一言一言、声にしていきます。「人は、どんな困難をかかえていても、幸せに生きることを見つけることができる」…東田君の言葉だからこそ、説得力に満ちた言葉に思えました。

桜も散り、春は多忙な日々に向けてさらに加速していく頃です。自分を取り巻く世界、自分の知らないことにも耳を傾け新しい発見をすること…。

それが豊かな人生を送るための大切な条件だと思います。